

2003/04

## ミニ一大通 だより

### 歓迎 春の一行様

「花は桜、魚は鰯」と、「細雪」の幸子が愛でた雅びな関西の春。「春宵一刻直千金」蘇軾が詠んだ深みのある中国の春。それぞれの場所に、それぞれの春。さてさて札幌の春はどこまで来ているのでしょうか。

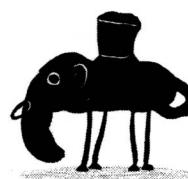
長い間、冷えるにまかせておいた私の自転車。ハンドルとサドルを拭いて、タイヤに空気を入れたら自転車開き。やっくりこぎ出して、春を迎えて行つてみました。



ここ、ミニ一大通には、歩道のほかに自転車通路がとあります。もわもわした空気が、あたりに漂っている気配。ぶくぶくの木の芽、ほぐれかけた土の地面…何もかもが、「もう隠しておけない！」と言つているようです。花屋さんの店先に黄色い花々が目だちはじめています。気温も上昇氣流。自然と口元がほころびます。春、カモーン！ほんとうにあいたかつたよ！

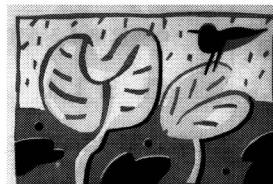
この季節になると、ふと思いつかず、戻りたくなる場所が私にもあります。勤めていたところの帰り道のバス停です。行く人、来る人、様々な人が交差するやるせない夕暮れ。なま暖かい春の風景。と、ぼんやり霞んだ街の景色。そして、どこからともなく漂う沈丁花の甘い香り。新しい環境に戸惑つたり、張り切りすぎて疲れた心に、春のバス停でのひとときはほどよい「緩和」をあたえてくれたのでした。

あなたの、戻つてみたい場所はどこですか。



雨上がりのミニ一大通。鳥たちのさえずりが響きます。歩道に揺れるブランターメンバーは増えたのかな。まだ巣の中でデビュ一を行つていているのかな。そう、春は移動の季節。札幌にも多くの人がやってきました。新しい環境にはもう馴染まれましたか。そして札幌を離れていた人たち。今さらどうしているでしょうか。札幌を、ミニ一大通を、時々、思い出しているかもしれません。

「……掌を太陽に透かしてみれば真っ赤に流れる僕の血潮あ」「掌を太陽に」というタイトルです。幼い頃のうすくやわらかなのがありました。



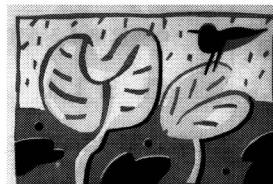
2003/05

## ミニ一大通 だより

### 春のバス停

雨上がりのミニ一大通。鳥たちのさえずりが響きます。歩道に揺れるブランターメンバーは増えたのかな。まだ巣の中でデビュ一を行つていているのかな。そう、春は移動の季節。札幌にも多くの人がやってきました。新しい環境にはもう馴染まれましたか。そして札幌を離れていた人たち。今さらどうしているでしょうか。札幌を、ミニ一大通を、時々、思い出しているかもしれません。

「……掌を太陽に透かしてみれば真っ赤に流れる僕の血潮あ」「掌を太陽に」というタイトルです。幼い頃のうすくやわらかなのがありました。



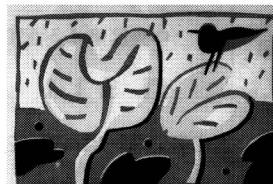
2003/06

## ミニ一大通 だより

### 光と影の季節

雨上がりのミニ一大通。鳥たちのさえずりが響きます。歩道に揺れるブランターメンバーは増えたのかな。まだ巣の中でデビュ一を行つていているのかな。そう、春は移動の季節。札幌にも多くの人がやってきました。新しい環境にはもう馴染まれましたか。そして札幌を離れていた人たち。今さらどうしているでしょうか。札幌を、ミニ一大通を、時々、思い出しているかもしれません。

「……掌を太陽に透かしてみれば真っ赤に流れる僕の血潮あ」「掌を太陽に」というタイトルです。幼い頃のうすくやわらかなのがありました。



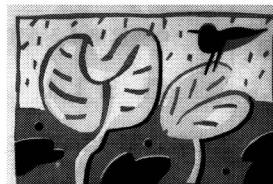
2003/07

## ミニ一大通 だより

### 夏の少年

雨上がりのミニ一大通。鳥たちのさえずりが響きます。歩道に揺れるブランターメンバーは増えたのかな。まだ巣の中でデビュ一を行つていているのかな。そう、春は移動の季節。札幌にも多くの人がやってきました。新しい環境にはもう馴染まれましたか。そして札幌を離れていた人たち。今さらどうしているでしょうか。札幌を、ミニ一大通を、時々、思い出しているかもしれません。

「……掌を太陽に透かしてみれば真っ赤に流れる僕の血潮あ」「掌を太陽に」というタイトルです。幼い頃のうすくやわらかなのがありました。



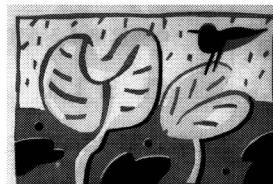
2003/08

## ミニ一大通 だより

### 午後の仕事

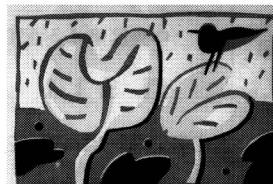
雨上がりのミニ一大通。鳥たちのさえずりが響きます。歩道に揺れるブランターメンバーは増えたのかな。まだ巣の中でデビュ一を行つていているのかな。そう、春は移動の季節。札幌にも多くの人がやってきました。新しい環境にはもう馴染まれましたか。そして札幌を離れていた人たち。今さらどうしているでしょうか。札幌を、ミニ一大通を、時々、思い出しているかもしれません。

「……掌を太陽に透かしてみれば真っ赤に流れる僕の血潮あ」「掌を太陽に」というタイトルです。幼い頃のうすくやわらかなのがありました。



この季節になると、ふと思いつかず、戻りたくなる場所が私もあります。勤めていたところの帰り道のバス停です。行く人、来る人、様々な人が交差するやるせない夕暮れ。なま暖かい春の風景。と、ぼんやり霞んだ街の景色。そして、どこからともなく漂う沈丁花の甘い香り。新しい環境に戸惑つたり、張り切りすぎて疲れた心に、春のバス停でのひとときはほどよい「緩和」をあたえてくれたのでした。

そんな幼い日の残像を探して、ふと目を閉じてみるのでした。



イル・ポステイナー  
大谷 薫

イル・ポステイナー  
大谷 薫